

報告会では、各分科会のコーディネーターがそれぞれ議論された内容を報告し、飯田市長がサミット宣言を行った。また、浜松市長が次回開催地域を代表してあいさつをした。

■「道」分科会

コーディネーター 飯田市長 牧野光朗



今回の分科会は、新東名高速道路、三遠南信自動車道など、三遠南信地域連携ビジョンの重点プロジェクトに位置づけられています。交通基盤の整備が着々と進みつつある中、「三遠南信自動車道 一次代を拓く交通基盤」というテーマのもと、整備効果や将来の期待、また、整備効果をさらに高めるために、今後、我々が取り組む課題などにつきまして検討をいたしました。

まず、国土交通省中部地方整備局飯田国道事務所の花木所長より、「三遠南信自動車道の整備効果とリニア時代の地域づくり」というテーマのもと、三遠南信自動車道整備事業の進捗状況、道路整備により期待される効果、リニア中央新幹線を生かした道路整備や産業活性化につきましてご報告をいただきました。

整備効果といたしましては、高規格幹線道路インターチェンジへのアクセス時間が60分を要する地域の解消、災害に強い地域ネットワークの構築、第三次救急医療施設

への60分以内の搬送実現による救命率の向上といった医療サービスの向上、高速サービス向上による観光振興などについてご報告をいただきました。

観光振興や産業の活性化など、リニア中央新幹線の開通効果を三遠南信地域全体に波及させるためにも、三遠南信自動車道の整備が不可欠であることを改めて確認する機会となりました。

分科会参加者による意見交換におきましては、三遠南信自動車道の一部供用や新東名高速道路御殿場インターチェンジ、三ヶ日ジャンクションの開通、国道23号名豊道路の整備などによる効果としまして、産業振興の一体的な発展や観光客の増加による交流人口の増加、地域医療や救急医療体制の充実、災害面での強化や生活環境の改善など、さまざまな分野において多くの効果があることが報告されました。

また、具体的な提案といたしまして、三遠南信経済開発協議会からは三遠南信連携による経済効果調査に関する提案、住民団体などからは三遠南信の連携をさらに強固なものとするために企業や住民同士の交流や意見交換の定期的な開催や道の活用（道使い）の視点も必要との提案をいただきました。

将来的な期待といたしましては、南北軸である三遠南信自動車道に東名高速道路、新東名高速道路、浜松三ヶ日・豊橋道路、そして、将来的に三遠南信の北の玄関口となりますリニア中央新幹線がつながること

で広域的なネットワークが形成され、さらなる交流人口の増加、産業の創造・活性化、文化的な交流などが促進されるとの期待の声が聞かれました。

安全・安心という視点からは、三遠南信自動車道の早期全線開通により、救急医療機関施設の搬送時間の短縮につながることへの期待、また、地震、津波といった大規模と災害時には避難経路の確保、円滑な救援や復旧活動・救急医療活動に必要な交通基盤、つまり、「命をつなぐ道」としての効果を発揮するということから、ミッシングリンクとして位置づけられております三遠南信自動車道の早期整備が必要なことを改めて認識しました。

以上のとおり、今回の分科会を通じまして、広域的な交通基盤整備による効果や期待を踏まえた上、改めて三遠南信自動車道の早期全線開通の必要性を強く認識しますとともに、その実現に向け、三遠南信地域連携ビジョン推進会議を中心に、行政、経済界、住民といった関係者がさらに連携・協力をしながら、国や県に対しまして継続的な要望活動に取り組みことが重要であることが確認されました。

以上をもちまして、「道」分科会の報告とさせていただきます。分科会にご参加いただきました皆様方の積極的な発言・提言に改めて感謝を申し上げます。

ありがとうございました。

■「技」分科会

コーディネーター

飯田市工業課

(公益財団法人)南信州・飯田産業センター

飯田ビジネスネットワーク支援センター

オーガナイザー 久保田優典

「技」分科会は、行政3名と経済界6名、住民団体2名で開催いたしました。

会の冒頭、飯田市産業経済部の高田部長

より「飯田市の産業と取組み」につきまして報告をいただきました。

今回のテーマを「人財育成と持続的産業発展の有機的連携をめざす」と決めさせていただき、事務局より参加者へ事前アンケートを実施いたしております。

限られた時間ですので、アンケート項目に沿いテーマと結びつく三つのポイント>に重点を絞って報告をお願いしました。

一点目は「地域産業に活力を与える取組み」、2点目は「人財の育成と確保に関する課題と解決策」、3点目は「大学と教育研究機関との連携」について、参加者による事例報告を基に議論をしていただきました。



『まとめ』としましては

①「人・モノ・金」が集まる魅力的な新産業を積極的に生み出していく必要性がある。

これまで「技」と関係した産業分野では幾つか地域間で連携した取組みもされていますが、経済・社会環境等の状況が急速に変化している中で、新産業の創出に向けた集積化と連携した展開をもう少し具体的に進めていくべきである。

②集積産業を更に発展拡大させていく為に必要な人財は大学だけに偏ることなく、行政、企業、あるいは諸団体（NPO含）間での相互連携に踏み込んで、より実務的な仕組みを構築していく必

要がある。

ご報告の中にも、大学のある地域、ない地域、それぞれの特徴がありますので、県境連携を上手く活用して行けば良いのではないかという議論でした。

- ③「技」の分科会で議論されました内容を関係する組織体へフィードバックし、新たな視点で「結果と結びつく具体策を検討し、実務としてどう進めていくのが良いか」という提案型の議題に上げていきたい。

地域の特徴や環境を生かして産業に結びつけるという点では、「SENA」の円卓会議等で実際に検討されているそうなので、そこに我々の今回の議論を重ねていけたらという強い思いがあります。

分科会の最後に、少しコーディネーターとして意見を述べさせていただきました。今回21回を数える「地域サミット」ですけれども、これだけのメンバーが地域を跨いで集まるというのは、情報の共有化を含めて相互の親交・信頼の場として非常に良いことですが、年に1回だけで終わってしまう、しかも短時間で終わるといのは非常にもったいないと感じています。

従って、過去の「地域サミット」で重ねて来た経過と成果を一旦総括し、地域の環境変化や経済・社会状況が変わっている中で、次のステップとしてどういうことが必要なかという共通した認識を持つことが大切ではないかと指摘致しました。特に、地域単独や地域間で取組むべき課題があり、中期、短期で何をしなければいけないかというような点を踏まえた議論を継続して行って欲しいからです。

確かに、地域間で社会的基盤の特徴や差異が大きく、産業への取組みの方向性や規模、実施する場合の方法論、更に成果は一樣ではありません。そこには多くの苦労や

知恵があると思います。ですが、そうしたことを参加者と共有する前提で、総花的なくテーマから具体的に実施できる共通した内容を盛り込んだ議論をお願いしたかったのです。

会場に詰めかけていただいた聴衆の皆さんにも、次回以降の「分科会」開催に向けた課題を示し『まとめ』とさせていただきます。

最後に、飯田市商工会議所副会頭の萩本さん、それから、今回ご参加いただきました延岡市の首藤市長さんにも別な角度からご意見をいただきまして、これをそれぞれの立場で理解・咀嚼して生かしていきたいと思ひます。

「技」としては、以上3点の『まとめ』で終了いたしました。ご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。

以上で報告を終わります。ありがとうございました。

■「風土」分科会

コーディネーター

一般財団法人阿智開発公社

理事長 羽場睦美

「風土」分科会の状況、内容報告をさせていただきます。

一言で申し上げますと、「風土」分科会は大変熱く、そして、和やかに終わることができました。私もとられてしまったマイクを奪取するのが大変であったということで、皆様もとても地域づくりのいろいろなうんちくを語ってくださりまして、大変有意義な時間が流れたと、そんなふうに感じています。

今回の枠組みですが、「ないものねだり」ではなくて、「あるもの探し」のこの三遠南信の底力を探そう、使おうということがテーマで今回の話を持つことができました。

最初に、有名ですが、天龍村柚餅子生産者組合長の関様より、柚餅子をどのようにしてつくり出し、そして、どんな苦勞をして広めていったかというお話をお聞きしました。

柚餅子が大変おいしいものであることは、もう申すまでもないことですが、そのお話をされるお人柄、語り口調、そして、そこにさまざまな方が協力し、また、去っていかれたり、そのご苦勞をお聞きいたしまして、「まさに単なるものを売るのではなくて、その地域のご先祖様、800年とおっしゃっておいましてけれども、800年の坂部の歴史、文化、自然、そして、にじみ出る人、これをまさに6次産業どころか、六六、三十六、もっとででしょうか、そういったものを商品として、商品でしょうか、文化でしょうか、売るということをお聞きした次第でございます。

最初にそのお話の基調報告をいただきまして、皆さんとディスカッションに入りました。

ディスカッションについては、細かいことは省かせていただきたいと思いますが、ちらっと申し上げますと、各地の名物・産物を、ないものではなくてあるものをいかに発見し、あるいはあってもそれをさらに改造して、お口に合うように、あるいは人の耳に届くように魅力的な商品に仕上げていくという工夫、ご苦勞を様々な方々からお聞きしました。

そして、最後にまとめということになりました。

様々な資源はある。その資源を都会の人は都会の目で見ていると資源にならない。山に住んでいる方は山に住んでいる方の目で見ていると資源にならない。お互いに自分たちが持っていない感覚、フレッシュな感覚で資源をさらに発展させていくことが必要なのではないか。そういったものを体

系化して、地域ブランドとして、まずは小さな地域ブランド化して、そして、最後には全体として三遠南信のブランドとして確立するような、いわゆる体系化、整備が必要ではないか。すなわち戦略でいいますと、ロジック設計とかセオリー設計といった、設計をもう一度、出たものを材料にしてし直す必要があるのではないかという1点目のまとめとなりました。

2点目は、それらをただ並べるだけではなくて、時間軸で追って、いつ、どのように、だれが、どうしてやっていくか。いわゆるそのプロセスをプログラミングしていく必要があるのではないかということです。

さて、3番目に、天龍村の大平村長から「毎回毎回やってももったいないではないか。これを形にして、みんなが共有して、去年から今年、今年から来年にということ築き上げていくことが必要ではないか。」という、大変すばらしいご提言をしていただきました。

ということで、三つ目は、今までつくり上げてきたすばらしい計画をチェックして、そして、再度アクションをしていく、リアクションしていく。トライをしていく。チェック・アンド・トライをしていくということがこの次の方向として大事になってくるのではないかというようなお話が出ました。



さて、そういうことで三つのポイントにまとめることができましたけれども、最後に一つ、逸話を申し上げまして終わりにしたいと思います。

鈴木田原市長さんから大変おいしいお話が出ました。芋を加工して喜久水でうまい焼酎をつくったとのことでした。1,000本つくったがぱっと売れ切れてしまったという、大変よだれの出るようなお話をちょうだいしたのですが、さあ、これから懇親会でと会場の皆さん、みんな期待したわけです。「今回は持ってきていないが」と。次回はお持ちをいただけるということでございますので、こんな楽しみを残しながら私たちの「風土」分科会を和気あいあいと閉じることができました。

以上、簡単ではございますが、ご報告とさせていただきます。

■「山・住」合同分科会 コーディネーター

豊橋技術科学大学 教授 大貝彰



「山・住」分科会では、今年、「人口減少時代における地域社会の持続可能性を考える」というテーマで意見交換をしました。今回のテーマは極めて大きなテーマでありまして、なかなか議論的が絞りづらいところではありましたが、それぞれの方から非常に熱い思いが語られて、時間がなくなったという次第であります。

全体としては、まず初めに、今日の全体

会でパネリストを務めていただきました島根県中山間地域センターの藤山様から、「新たな地域社会の持続性を考える」というテーマでご報告をいただきました。その中で、私が非常に印象に残っている言葉として、冒頭に、「規模の経済から循環の経済へという、この考え方が中山間地域には必要である。」ということを言われた。これは非常に的を射た言葉だと思います。

もう一つが、これからの中山間地域の活性化、あるいは持続可能性というものに取り組んでいくときに、やはり地域の中での個々の小さな取り組みであるとか、いろいろなもの、資源であるとか、そういったものをつないでいく人であるとか、あるいは組織であるとか仕組み、そういったものをつくっていくということが必要であるというようにご提言をいただいたかと思えます。

続いて、意見交換に移ってまいりました。

最初に「定住促進」、それから、「地域活力を維持するためには」ということで、それぞれの具体的な取り組み事例。続いて、この三遠南信地域の、特に中山間地域を内から見た視点と申しますか、内部から見てどういった魅力があるのか、あるいはどういった資源を持っているのか。逆に、外から見たときに、この地域はどう見えているのかという視点からそれぞれご意見をいただきました。

最後、そういった資源を生かして、この中山間地域の維持や生活環境の向上に結びつけていくためには何が必要なのかという視点からご意見をいただきました。冒頭にも申しましたけれども、皆様、非常に熱い思いが出ていました。個々の取り組みもこれまでになく、実は私、ここ4年ほど続けて、この「山・住」分科会のコーディネーターを務めてさせていただいておりますけれども、今回ほど参加者の皆様の熱い思いが伝わってきた分科会はなかったなという

ように思っております。個々のご発言については、もうここであえて言う必要はないのかなと思います。

最後のまとめについて、この場で2点ほど確認をしましたので、そこについてのみ報告させていただきます。

まず1点が、中山間地域の定住促進を推進していくためには、よく言われることではありますけれども、人やものの交流、連携を図るということだろうと思います。特に、それぞれの地域での雇用の場をどうつくっていくか。こういった取り組みは、もう既にそれぞれの地域で非常に積極的に行われていると、今日、具体的な報告がありました。ですから、これからはそういう小さな取り組みを横につないでいく、人でつなぐ、あるいは仕組みでつなぐ、そういう

取り組みが三遠南信地域のこの中で必要なのではないかということが一つ。

2点目は、これも以前から言われていることではありますけれども、結局、まとめますと、この地域の持っている資源を生かした取り組みをより活性化させて、定住促進、あるいはこの地域の活力を向上させていくという意味において、やはり情報発信、これが欠かせないだろうということ。そのためにSENAを中心として体制の強化・整備をする必要があるのではないかとということ。

この2点について、この分科会で確認させていただきました。

以上、私からの報告であります。どうもありがとうございました。



■ サミット宣言 飯田市長 牧野光朗

第 21 回三遠南信サミット in 南信州では、「新しい連携体制の実現に向けて～三遠南信連携の発展と越境連携地域交流～」をテーマとし、各分科会において、現在の状況、課題を検証の上、今後の展開に向けた取り組みについて議論をしました。

私たち三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）は、新たな連携に向け、本日のサミットでの議論を踏まえ、次の事項に重点を置き、県境広域連携の先駆者としての自覚を持ち、事業の推進に取り組みます。

1、三遠南信自動車道の一部供用開始により、地域医療の充実、産業・観光の活性化等整備効果が見られます。また、大規模災害時には、「命をつなぐ道」として効果を発揮することから、全国ミッシングリンクに位置づけられる本道路の早期完成の重要性を再認識しました。圏域の振興・発展のため、三遠南信自動車道の早期完成全線開通、リニア中央新幹線の早期開業、さらに浜松三ヶ日・豊橋道路、三遠伊勢連絡道路の実現を目指し、三遠南信地域連携ビジョン推進会議を中心とし、地域一体となった提言活動等を進めます。

2、地域の強みである産業基盤を最大限活かし、「三遠南信地域基本計画」や「地域イノベーション戦略推進事業（国際競争力強化地域）」による広域連携や産学官連携を一層強化し、国際的視野に立ち、オープン・イノベーションによる技術革新、成長市場へのチャレンジ、人材育成を推進し、地域産業の競争力強化、新産業の創出を目指します。また、三遠南信地域内の大学連携については、産官金との連携による、人財育成等について議論の場を設けることなどを通じて、引き続き検討してまいります。

3、「塩の道エコミュージアム」の形成に向け、自然、歴史、文化、産物など地域資源を見つめ直し、それらを活かした三遠南信の魅力の発信力を高め、地域固有の商品・サービスの提供により、三遠南信地域における持続的な観光客誘致等を促進します。

4、中山間地域を活かす流域モデルの形成に向け、各地域の定住促進施策等の推進のため、人・ものの交流・連携を図るとともに、情報発信体制の整備・強化を進めます。また、地震や台風等による、広域的または局地的な災害に対応するため、県境を越える防災体制の強化について相互連携して取り組み、安全・安心な地域の形成を推進します。

5、三遠南信地域連携ビジョン推進会議（SENA）は、現在の組織の体制強化を図るために平成 26 年度中に新しい体制に移行します。今後は、新しい体制のSENAと平成 28 年度を目途とした広域連合設置を検討する各自治体との間で、将来的な協力体制構築に向けて協議を進めます。

これらの取り組みを、ここに集うすべての主体が確認し、第 21 回三遠南信サミット 2013 in 南信州のサミット宣言といたします。

平成 25 年 10 月 30 日

三遠南信地域連携ビジョン推進会議
三遠南信サミット 2013 in 南信州

○次回開催地域挨拶

浜松市長 鈴木康友

皆様、長時間にわたりまして大変お疲れさまでございました。それぞれ有意義な議論がされたのではないかと思います。また、今回、このサミットを開催いただきました飯田市を初め、南信州の皆様には厚く御礼を申し上げます。

今回のサミットでは、来年の新体制移行を前提とした議論が行われたということ、そして、県境を越えた連携、あるいは様々な取り組みについて、全国的なシンポジウムが開かれたということは大変意義の大きいことであったと思います。県の境を越えたこうした取り組みが認知をされ、少し脚光を浴びてきたということは、これは一つ、大きな時代の転換点だと私は思います。

今、47府県体制ですけれども、これは明治21年にでき上がって125年間、微動だにしていません。この日本の中央集権的な、ピラミッド的な自治の構造をいかに府県体制が支えてきたかということがわかんと思います。

少し私、府県体制について調べているわけですけれども、でも、いきなり47になったわけではなくて、皆様ご承知のとおり、明治になり、実は最初、廃藩置県によって3府302県ができました。明治維新というのは分権型の幕藩体制から、中央集権的な欧米列強に伍する近代国家をつくるというのが明治の革命でしたので、305も地方政府があつては困るわけですし、合併に合併を重ねて38まで減ります。しかし、上からの強制的な合併に反乱を起こしまして、今度は分離運動が起こります。宮崎県が鹿児島県から分離し、奈良県が大阪府から分離しました。こうした分離運動の結果、明治21年に最終的に香川県が愛媛県から分離して、47の府県体制が完成をしたわけであります。

ですから、この歴史を見ますと、この明治のときにできた47の府県体制に必然性・合理性があったというわけではありません。これが125年間、ずっと続いてきて、そろそろこの県の境を越えた取り組みをしてもいい時期、時代が来たのではないかと私は個人的にそう思っていますし、そういうものが脚光を浴び始めたというのは、これまで三遠南信地域の連携を積み重ねてきた成果ではないかと思っています。

来年はいよいよ22回目でございます。これで7周したわけです。ずっと3市で開催をしてきましたけれども、いよいよ8巡目に入ります。来年のこの開催は、新S E N Aでの開催ということになりますので、ぜひまた一つステップを上げて、この三遠南信地域連携ビジョンの実効性ある推進に向けた議論が積み重ねられることを大いに期待をしたいと思います。

そして、ちょっと浜松市の宣伝をさせていただきますと、来年、浜松市で花博が行われます。10年前に浜名湖花博という大きな花の博覧会が行われました。その10周年を記念して、来年、花博が開かれます。秋に開催できればよかったですのですが、残念ながら春でございます。そういう意味では、来年は皆様にぜひ春と秋と2回、浜松市へお越しをいただきたいと思っています。

来年のサミットに向けまして、多くの皆様にご参加いただきますことを心からご期待を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

本日はまことにお疲れさまでございました。ありがとうございました。